

# テーブルウェアの意匠改善並びに試作研究

(モーニングセット) (キャンドルスタンド)

## A Study of the Improvement of Table Wear Design and its Manufacture

(Morning Set) (Candle Stand)

藤 本 猛

Takeshi Fujimoto

### I. まえがき

デザインが単なる造形活動ではなく、「もの」作りを通じて日常生活に即した工芸のあるべき姿を求め、生活との結びつきを求めるため、この研究は生活用品の意匠改善の一環として行ったものである。従来日本の伝統技術・素材をテーマに「地方伝統工芸技術の近代化<sup>1)</sup>」等、日本の伝統技術や素材を新しい日用器具の事例に展開して、その成果は種々の日用品開発となってそれらは夫々めざましい発展をとげ地方産業発展の一助となってきた。

デザインの実務にたずさわる人達にとって設計資料は常時欠かせないものの一つであるが、生活用品の中でいわゆる軽工業雑貨といわれるクラフト製品は品目が多岐に亘り、その個々について調べる事は可成りの負担と云わなければならない。このため設計資料の整備はデザイナーにとって、又関係企業にとって緊急必要視されており、今回はモーニングセット・キャンドルスタンドを対象としてとりあげ資料を蒐集整理報告する。本資料の目的はあくまでデザインの実際に資せんとするもので内容は一般的常識、諸元、デザイン、使用状況等に重点を置き文献調査と実際のデザインを通して得られた資料を基にして記してみた。

### II. 概要

#### (1) モーニングセット

モーニングセットという言葉は国内ではよく見かけるが、海外(英米)の参考文献を調べてもなく、欧米人デザイナーに訊ねても判明しない。もし現在国内でよく使われている意味のものであるならば、それはBreak fast setと云った方がわかりがよいと思われる。ブレックファーストセットという言葉も、英米の参考文献では見つけることはできなかったが、わずかにスエーデンの本に見ることができた。

国内においてもモーニングセットに関する考え方や解釈には巾があり、そのスタッフについても種々あり、決ったものはない。欧米に朝食のためにセット化した品種のものはないようである。しかし調味料を幾品かまとめてセットにすることは多い。こういう場合もカジュアルな

感覚でまとめたものである。モーニングセットとは結局、朝食に使う食器の幾品かを抽出してセット化したと考えてよく、その多くはカジュアルな考え方が多いようである。和朝食の方では朝食揃いという品目に相当するものである。欧米人のモーニングセットのスタッフの選び方もその朝食の内容およびそれに使われる容器を知らなければならない。欧米人の朝食のとり方は人により異なるが概して近代人の朝食の量は次第に少なくなってきたようである。その献立でも国により異なるが、朝食は、おおむね淡白なものであるようである<sup>2)</sup>。

モーニングセットのスタッフについては決まったルールがないことは前述したが、現在までに調査した結果では、次のような内容のものにモーニングセットと名付けられていた。それには、調味料入れ等をまとめた物と、ポットやカップ、皿等を主にしてまとめたものに分けられる。

- ・調味料入れ等をまとめたもの
  - (a) ジャム入れ, マーマレード入れ, バター入れ, 砂糖入れ, ミルク (クリーマー) 入れ
  - (b) 塩入れ, 胡椒入れ, 酢入れ, サラダ油入れ, (芥子入れ)
- ・カップや皿を中心にまとめた物
  - (c) モーニングカップ, ソーサー, エッグカップ (ソーサー), 大皿, 塩入れ, 胡椒入れ, ナプキン (ナプキンリング)
  - (d) 深皿 (ソーサー) 又はボール, ジュース用カップ, 水用タンブラー, ジャー, ポット, 盛器, ナプキン
  - (e) パン用小板 (パンを乗せるボード), 深皿 (これには大皿がソーサーとして使われている), タンブラー, ジャー (ジュース, 水等), ナプキン

ティー又はコーヒーポットや大皿などはティーセットのものやディナーセットのスタッフの中から適当に選んでセッティングしたりしている事が多い。しかしそれらセッティングされたものは全体が何らかの形で統一がはかられている。たとえば

- (A) 形態
- (B) パターン, 色彩
- (C) 材料の組み合わせ

などがある。カジュアルな考え方では、調味料グループ、皿、カップおよびポットグループ、など異った感覚の物を混ぜて使う事もある。全体の感じとしては色も多く使われ、形態も形にはまらない、くだけた楽しいものになっている例が多い。セットの内容としてはガラス器と陶磁器との組み合わせが多い。ボール (深皿) や、カップがガラス器の場合はほとんどが色ガラスであり、陶磁器の場合はたいていパターンが施されている。モーニングセットとかランチオンセットとか食事のためのセット化は航空機上食や<sup>3)</sup>、集団給食のあり方にも影響しているようである。

容量については、各容器に対して決まったルールはない。しかし、標準的容量とか、これ位の量が入ることが望ましいということについて述べる。

- ・ポット, カップ
 

モーニングカップとソーサーが使われるが、モーニングカップは普通180cc~200cc位がゆっくり入る容積が必要である。コーヒーカップは100ccが充分入る (容器の八分目) 程度、ティーカップは8分目で120cc程度が実際に飲まれる。目分量で8分目程度注ぐと120cc程度になるよう設計が望ましい。従ってポットは何杯分入れられるかによって容量を定めれば良い。一般にティーポットは8杯から10杯分の容量が用意されている。1,000cc前後のポット

に対し、このカップは全体で180cc程度、8分目で100cc程度、ポットにはやはり8杯から10杯分入る。

- ・ミルクジャー、ジュースジャーは1ℓが充分入る程度（8分目）、ミルクジャーは大きくクリーマーは0.2ℓが入る程度、この場合クリーマーは使わず、ジャーが望ましい。
- ・皿（卵又はハム類料理）25.5cmφ程度
- ・砂糖入れ、砂糖はだいたいクリーマー程度の大きさである。朝はシーリアルやティーまたはコーヒーにも使うので粉砂糖を使うことが多い。
- ・S.P.セット、塩は湿気を吸いやすいので、味塩小袋1袋が入る程度が適量と思われる。
- ・形態による容量の変化、これはモーニングセットに限ったことはないが、容器には上方が底面に比べて広がっているものと（逆三角形）、その逆のものがある。それに対して感覚的に量を考えると実際の量と大きな開きがある。

カップソーサーや皿を設計する場合、テーブルからとりあげる時およびテーブルに置く時に充分指が掛けられる程度の立ち上がりが必要である。立ち上りは2cm程度がよいとされている。ソーサーは最も多く使われる、カップの安定性が一番重要になっている。底辺の安定度が十分考慮された設計でなければならない。

### (2) モーニングセットの設計試作について

ディナーセットから独立して使用出来るカジュアルなモーニングセットの設計を試みた。朝食に必要と考えられる品目を最少限度に揃えてセット化した。陶磁器を主体として、ほかにパン籠、ボード類をセットし形態的に日本独特の感覚を印象づけるため、和食器の形態を極力活したデザインをした。陶磁器製品の場合ポットの蓋はとかく落ちやすく扱いにくい部分となっているが、摘みはアクセントとしてデザインの重要なポイントになっている。注口は蓋と同様に使い勝手を重点にデザインを検討した。モーニングセットに対する決定的なルールはないが、しかしその性格から考えて、朝食を楽しくするためのものでなければならない。ヨーロッパ系のデザインは色彩も相当多く使われ、パターンも大胆に使われてきている。つまり全体の纏め方を大変カジュアルなものにしている、そして容器の形態の変化も多い。しかしカジュアルな感覚といえども高級品化を狙わなければ安物的チャチなイメージを与えてしまうので、この点に留意して設計を行った。試作は山本製陶所（佐賀県有田町）・長崎県窯業試験場（長崎県波佐見町）<sup>4)</sup>。

### (3) キャンドル・スタンド

ろうそく立の英名は普通Candle StickまたはCandle Holderが用いられているが、Candle Standも殆んど同義とみてよく、灯具の一種でろうそくを立てるのに用いる受け台を指している。Mayer<sup>5)</sup>は近代以前の照明器具について宗教用と家庭用の二種に分け、家庭用のものについて次のように分類して名称としている。キャンドル・スティック、ハンド・キャンドル・スティック、キャンデラブラム、キャンドル・ブラケット、古代ランプ、ペンダントランプ、シャンデリア、近代ランプ等、このうちキャンドル・スティック、ハンド・キャンドル・スティック、キャンデラブラム等のように形体的に基礎部分 (Base)、支持部分 (Stick) とろうそくの受け (Plate) の部分がはっきりと区別されるものには適切であるが、最近のようにブロック (塊) やユニット (単体) の組み合わせによるもの等では必ずしも妥当とはいえない。Anthony

ColevidgeはWorld Furnitureの中で新しいCandle-standの名称を用いている。キャンドルスタンドの名称は種々のろうそく立てを含んでおり、Candle Holderとともにより現代的呼称となっている。

キャンドル・スタンドが使用されたのは古くはB.C.1600年前、クレタのミノス宮殿跡から発見された直径18cmほどの受口のある土器とみられる。以後、史実に残っているものではB.C.1300年頃のエジプトやB.C.300年頃のポンペイの遺跡にもみられる。降ってA.D.300年頃のもので人体や動物の足を模した青銅製品が現在まで残存している。さらにA.D.1300年頃のものでは造型的、技術的にも非常に優れており、A.D.1600～1700年頃ではその黄金時代を迎え、いわゆるロココ・バロック風の時代様式の全盛をみるが、材料としては金、銀、銅、鉄など各種の金属や大理石、陶磁器、ガラス、七宝なども使用された。近代に入って電灯照明が発明されるにつれてキャンドル・スタンドの使用は衰微するが、今なお室内調度として使用されている。特に北欧では緯度の関係から昼間が短く、夜が長いことや気象とも関連してキャンドル・スタンドを使用することが多く、現代的な数々の優れた製品を生み出している。我が国ではいわゆる燭台が使用されたのはA.D.1200年頃中国から伝来したとされているろうそくと同じ頃と推定されているがA.D.1600年頃から行灯、提灯などと共に燭台は広く使用されるようになった。しかしながら現代における使用は宗教、室内装飾等の非常に限られた範囲にとどまっている。

ろうそくについてはキャンドル・スタンドと切り離せないものであるが、現在では殆んどパラフィンが用いられる。溶融温度を高めるため1～3%のステアリン酸が加えられている。普通、ろうそくという場合はこれを指し、無風状態で使用した場合著しくろうそくが流れ出さないよう配慮されている。

テーパーの付かない普通使用されているろうそくの大きさは号数で示され、底部には保持するための針穴が付けられている。しかし、テーパーキャンドル（抜け勾配の付いているろうそく）ではインチ寸法が使用されており、かつ針穴が付いていないのでキャンドル・スタンドとの嵌合は設計上でも注意すべき点である。なお、動物や幾何形体を形どったものやケーキ等に用いられる装飾用ろうそくでは単独に使用したり、簡単に取り付けられるのでキャンドル・スタンドは普通には用いない。テーパー・キャンドルについて形体上、特に取り決めがある訳ではなく、ろうそく製造業者が輸出に際して、相手国の使用事情を基にしたもので、各国ともまちまちなのが現状である。北欧の製品の中には小指ほどの太さで30cmほどもある細長いろうそくがあって、キャンドル・スタンドと組み合わせにしたものがみられる。

ろうそくの保持方法はキャンドル・スタンドに円錐状の針を付けておき、差し込んで保持するものとコップ状の受けを付けて、差し込んで保持するものがみられる。その他ではパイプ状の金属キャップをろうそくに被せて、コイルバネで押し上げて保持するものなどがあるが、特殊な例とみられる<sup>67)</sup>。欧米では一般に受皿のものが多く、針のものは少い。受皿のものが広く普及している理由にはろうそくの取り付けが容易であること、ろうそくの安定がよいこと、使用中の傷害の危険性が少ないこと等があげられよう。

次にろうそくの保持を受け皿によって設計する場合に留意すべきは、受け皿の抜け勾配をテーパー・キャンドルの下部の抜け勾配より、幾分少なめにとり、深さを大きくとると良い。このような場合(イ)のようなデザインが望ましい<sup>68)</sup>。またテーパー・キャンドルの下部には切り込み加工してあるものがあるが、押し込むと同時に凸起部分のろうそくが崩れるものでより小さめ

の受け皿にすると比較的スムーズに差し込むことが出来る<sup>9)</sup>。キャンドル・スタンドのろうそく取り付け部分を除いて寸法に関しては特に制約はない。要は調和のとれた機能を満足するものであれば良い訳である。テーパー・キャンドルの標準的な寸法から考えられるろうそく受け皿の内径寸法は20～22φmmが適当であろう<sup>10)</sup>。

欧米のキャンドル・スタンドは室内調度品として、現在も広く使用されている。マントル・ピースの上に対のキャンドル・スタンドが飾ってある情景は単に灯具としてだけでなく、装飾品としての役目をも果していた。しかし、現代ではこのような格式ばった使用より、もっと気楽に、生活を楽しくするためにとりあげられており、スタイルも伝統にこだわらない新製品も多くみられる。一般にキャンドル・スタンドが使用されるのは、訪問客と談合したり、食事をしたり、家族だけの団らんや誕生等の場合が多い。キャンドルの灯は食事中に点ける場合もあるが、始めのうちだけ点け、あとで消すときもあり、また電灯と併用して用いる場合もある。要はそのときの用い方によってスタンドの種類も選ばれるということになる。最近我が国においても電灯照明を極端に暗くし、ろうそくの灯で食事をさせるレストランもみられる。このような使用状況を反映してか、ろうそくにも変形ものや極太のものなどもみられ、キャンドル・スタンドのスタイルの種類も多くなり、使用の目的に応じられるようになってきた。米国では少なくとも4～5種のキャンドル・スタンドが各家庭に常備されているといわれ、また北欧諸国ではその使用頻度が多く、消費は世界有数とされており、キャンドル・スタンドの種類も多くその開発も熱心である。しかもこれら北欧製品は高級品として知られている。最近のデザインの傾向としてはオーソドックスなスタイルを除いては、比較的小型のもの、折り畳みのもの、ユニットの組み合わせ式のものなどが紹介されているが、ろうそくの形体に合せたデザインが数多くなってきたことは注目される。また材質は金属、陶磁、ガラス、木、異種材併用などが一般的である<sup>11)</sup>。

#### (4) キャンドル・スタンドの設計試作について

欧米におけるキャンドル・スタンドの使用は我が国より深く生活に浸透し、人種、地域、季節によっては現在もなお需要が多く、ろうそくはテーパー・キャンドルの普及が目覚ましい。家庭用としては受け皿によるろうそくの保持が一般的であり、近代的フォルム、小型製品のものも多くみかける。この試作は一枚の鉄板よりの板金細工によるキャンドル・スタンドであるが材質、加工技術、近代的フォルムを活かしたデザインである。この種のキャンドル・スタンドは実用品としてよりも、装飾としての効果を求めたいものである。そのことから置かれた場所も形をすっきりとみせるような背景を考慮してデザインを試みた。真白いプラスチック化粧板の上に置かれたキャンドル・スタンドは、その美しい形を鮮明に浮きだたせ、木目板の上に置かれた場合は落ち着いた調和でまた異った美しさをみせてくれるデザインである<sup>12)</sup>。

### III. おわりに

近年我が国のデザインブームは著しいものがある。しかしその大部分は大会社、大メーカーに限られ、中小企業である軽工業雑貨生産業界では技術面販売面より営業政策上未だデザインが左右されることが多い優れた品質、加工技術をもちながらデザインが弱体である。

我が国の軽工業雑貨生産業界は中小企業であるが故にデザインが受け入れられないという現

象は、中小企業によって我が国生産業界が支えられていることを思えば、まさに国家的な憂いといわねばならない。その豊富な材料と技術を持ち合わせることに於いて世界に誇り得る工芸産業も、デザインにおいて製品が海外製品に遅れをとることは残念なことである。その豊富な材料と技術を如何に使いこなすかはデザインの仕事に課せられている。多くの仕事はデザインを欲している、大メーカーには早くからデザイン部門があったが一部を除いて前述の如くその重点は単なるパターンによって、デザインの基本的な態度は相変わらず弱められたままである。

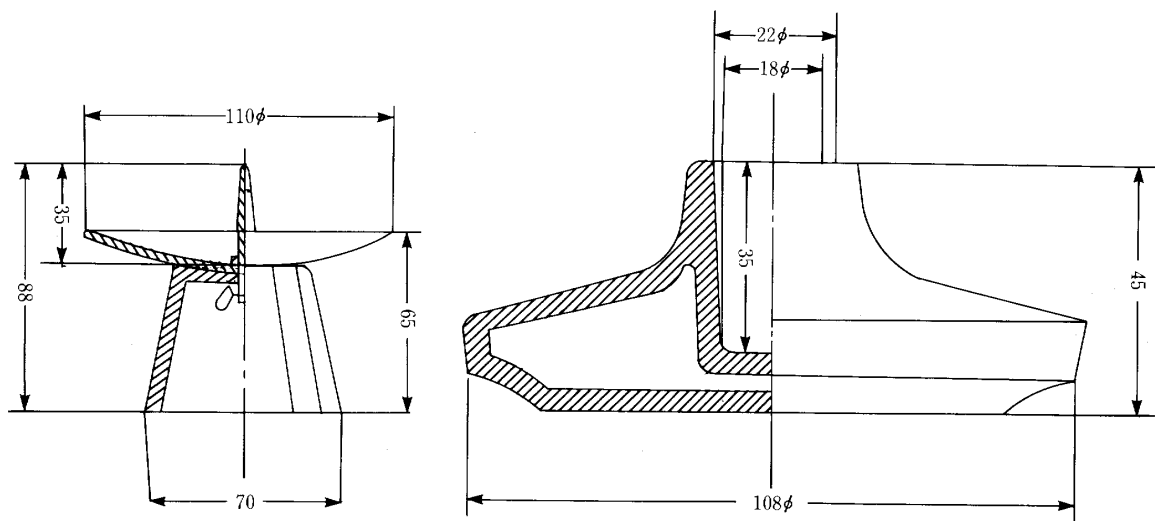


図1 ろうそく受けの針および受皿の例

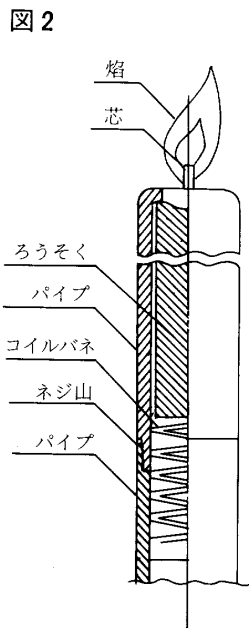


図2

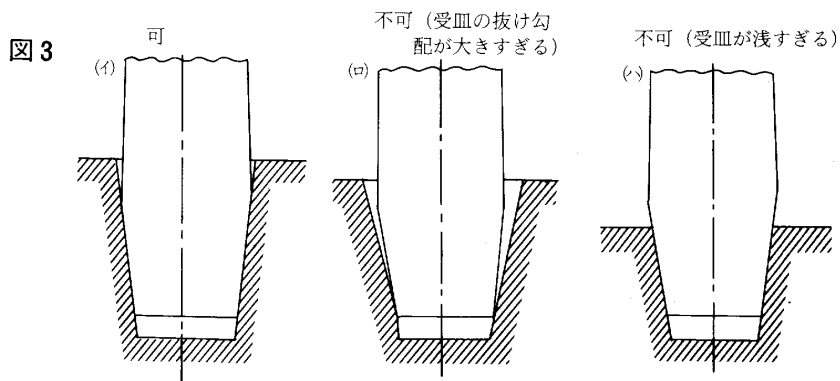


図3

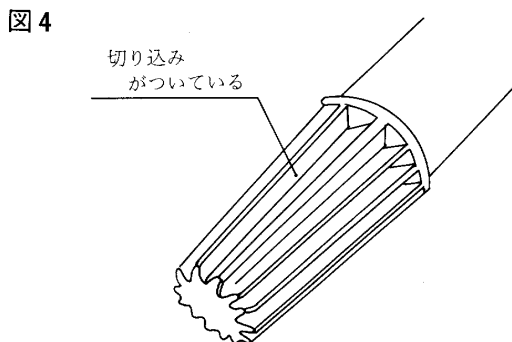


図4

テーブルウェアの意匠改善並びに試作研究



図 5

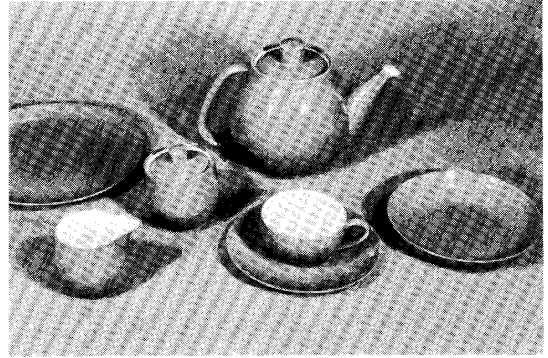


図 6

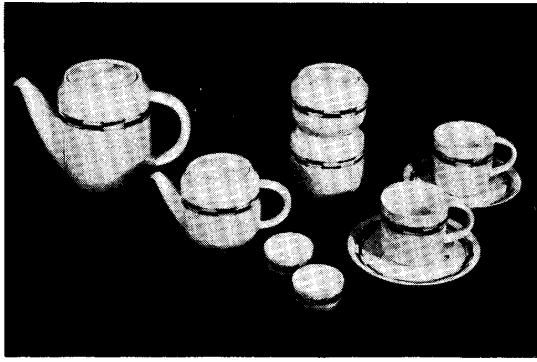


図 7



図 8

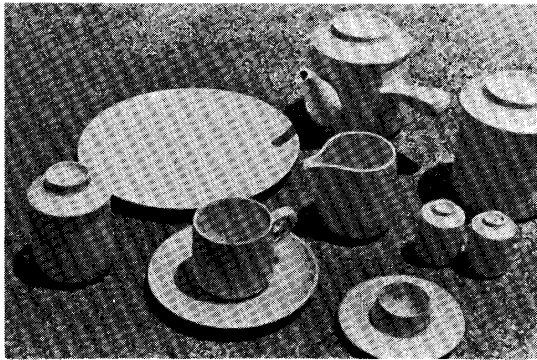


図 9

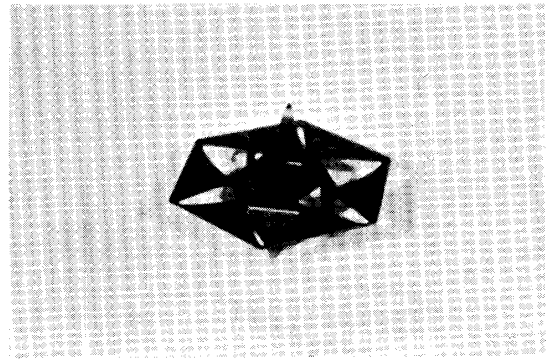


図 10

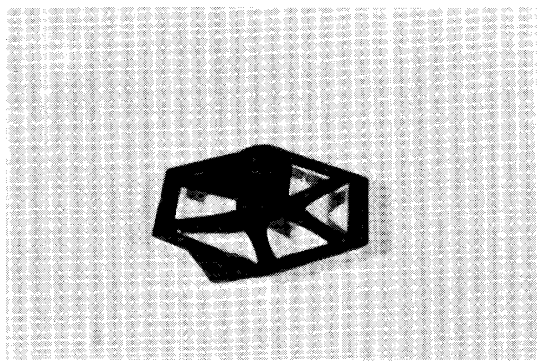


図 11

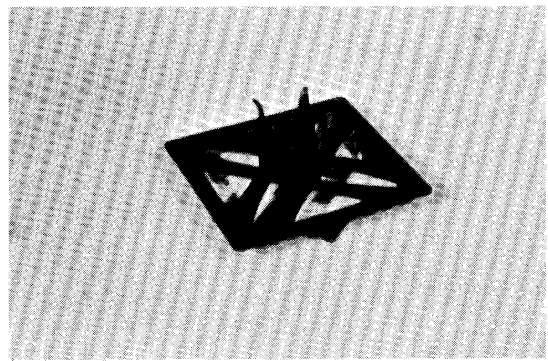


図 12

註および参考文献

- 1) 伝産法の施行により各県試験研究機関において主要テーマとして研究開発が行なわれている (1974)
- 2) 増井和子「暮しの手帖」 第90号 (1984)
- 3) 産業工芸試験所「旅客機の機装用品の意匠に関する研究」 (1958)
- 4) 図5, 6 明治以後洋式の製陶法が入り中火度磁器の製造が盛んになってきたが、我が国では在来から優れた低火度磁器の製陶技術をもっている  
図7, 8 呉須などの応用を試みた  
図9 長崎窯業試験場で研究の主原料に五島白土を用いた柔かい淡いクリーム色を呈する軽量の地方材料による高雅な感じのあるアイボリー陶器
- 5) Mayer 教育家 ドイツ人 著書に「装飾形態教育」がある
- 6) 図1 参照
- 7) 図2 参照
- 8) 図3 参照
- 9) 図4 参照
- 10) I A I と工芸連合部会の共同調査資料による (1964)
- 11) 日本貿易振興会ニューヨーク市場蒐集品による (1964)
- 12) 図10, 11, 12参照  
I A I デザインノート, 工芸ニュース Vol.25 No.7  
陶器と食器の事典 世界文化社  
朝の食事 中央公論社  
百科大辞典 平凡社  
灯火の歴史 M・イリーン  
ろうそくの科学 M・ファラディ  
技術の歴史 築摩書房  
世界文化史 角川書房  
灯火器百種百話 矢来書院  
British Encyclopedia (イギリス)  
Leucher und Lampen Aus Stahl (ドイツ)  
Hand book of Ornament (アメリカ)  
The World Furnitre (アメリカ)  
Absent (ドイツ)  
Forum (デンマーク)  
Form (スウェーデン)  
Wohnen Heute 5 (スイス)  
House and Garden (アメリカ) (イギリス)  
その他, 各社カタログ類, アンケート解答など